

オーニソガラム・アラビクムの増殖性について

寺田 孝重

Propagation of tubing on *Ornithogalum arabicum* L.

Takashige TERADA

オーニソガラム属(*Ornithogalum*)はユリ科に属し、ユーコノミス属やチューリップ属に近縁な植物群であるが、日本には自生種がなく、なじみの薄い植物であった。しかし、欧米においては、アレンジ用切花素材や花壇用として各種のものが利用されている。

本報のオーニソガラム・アラビクム(*O.arabicum* L.)は、この属の中では大型な種類で、春季の切花として需要が伸びており、オーニソガラム・シルソイデスなどと同様に、耐寒性の強い秋植え球根として分類されている。

栽培経過

'90年10月24日に奈良県農業大学の温室(管理最低温度 10℃)に定植し栽培したものの切下球を階級分けし、'91年9月24日に高原分場(宇陀郡榛原町三宮寺、標高約380m)の露路圃場へ定植した。定植間隔は、どの階級においても20cmとし、基肥として菜種粕20kg/aを施して耕うん後、黒色ビニールマルチを張ったうねに植付けた。

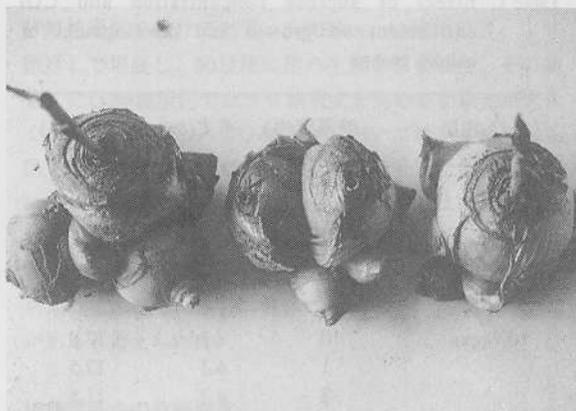
定植後、越冬葉が伸長した12月1日に、べたがけ資料によるトンネル被覆を行い、春季の新葉が多く見え出した4月10日に撤去した。この時、出蓄と思われる葉の重なりが多く、株で認められた。

開花は'92年5月13日から始まり、同25日で採花を終了した。(採花は、第1小花開花時に行った。)

その後植物体が黄化し最上位葉の先端が黄化を始めた6月19日に球根掘上げを行い、水洗・風乾後、定植時と同様にできうる限り分割し、各球の重量を測定した。

増殖の状況

本種の鱗茎は、タマネギ状をしている。分球は第1図のように、均等な2つの子球に分離する場合と、大きな1つの子球と多数の木子様の小球を派生する場合があり、ほとんど後者のタイプであった。



左：新球が小さく、派生小球が多い例
中央：二分裂型
右：新球が大きく、派生小球が少ない例

第1図 オーニソガラム・アラビクムの分球状況
Fig1. Division patterns of *Ornithogalum arabicum*.

さらに、大きな子球の周囲に派生する小球根にも、球形のものと扁平なクリの実状のものがあり、球状の小球は分離し易いが、扁平な小球は分離し難い傾向があった。

調査は、植付時の親球重量で100g以上、70~99g、50~69g、30~49g、10~29g(球状)、10~29g(扁平状)、10g以下(球状)、10g以下(扁平状)の8クラスに分け、それぞれ生存率、開花率、子球重量、派生小球数、派生小球重量の測定を行った。

結 果

本種の球根重量別栽培結果は第1表の通りである。

このように、標高380m地点において、市販球(ほぼ70g以上の球根が流通している。)を用いれば、枯死する

第1表 オーニソガラム・アピラクムの栽培結果
Table1 Flowwring and survival retio in *Ornithogalum arabicum*.

階級	生存率 (%)	開花率* (%)	二番花率 (%)
100g以上	100	150	50
70~99g	100	106.9	6.9
50~69g	95.6	88.6	0
30~49g	83.3	66.7	0
10~29g(球状)	86.2	27.9	0
10~29g(扁平状)	84.6	28.3	0
10g以下(球状)	82.2	0	0
10g以下(扁平状)	81.3	0	0

*定植球に対する開花率

ことなく最低1本の花茎が形成され、100g以上の球では2本の収穫も期待される。また、30g~49gの派生小球でも66.7%、10~29g球で30%弱の開花を見たことは、本種を自家増殖で栽培する場合、球根養成圃場においても切花収穫ができることを示している。

生存率は、50g以上の球でほぼ100%、それ以下では80%台となり、10g以下の非常に小さな球でも同様であった。

次に、自家増殖を行う場合に重要な、切下球の状況について調査した結果が第2表である。

本種の球根は、200g程度が最大で、普通には180g程度

が限度である。このため、100g以上の大球では新球総重量の増加は派生する小球が主体となり、子球本体については横ばいないし微増程度となる。

70~99gクラスの球根では、切下球においてもほぼ全個体が100g以上の大球に成長した。しかし、このクラスでは、派生する小球は小さくなり、第2表に見られるように、総新生球重の増加率は100g以上区を下回っている。

50~69g区と30~49g区についてはよく似た増殖傾向を示し、子球重量は倍増し、総新球重増加率は2.5倍程度となる。このクラスの球根は、70%以上開花するので、切花収穫と併せて効率のよい子球重の増加が期待できる。

10~29g区は、球状の形態によって球状と扁平状に分類したが、子球重量増加率など両者の間に大きな差は見られなかった。しかし、子球重量の増加率について、このクラスは4倍以上の高い伸びを示しており、来季の増殖用小球として重要なものと考えられた。

10g以下の球根については、1年間の培養により平均して10~29gクラスに生長するが、翌年も培養が必要となるので、増殖用としては10~29g球ほど重要ではない。

以上のように、オーニソガラム・アラビクムは切下球においても繁殖効率がよく、翌年への利用が可能である上に生産量も増大していく。さらに、子球より派生してくる10~29gの木子状小球も1年間の養成によって、翌年十分開花の見込める球に成長する。

本種は、省力的な切花作物として有望視されているとともに、増殖能力も高いことが明らかとなり、今後本県における切花素材として期待される。

第2表 オーニソガラム・アピラクムの子球及び球根生産総重量について
Table2 Propagation of *Ornithogalum arabicum*.

階級	植付球重 (平均)	子球重 (平均)	子球重増加率	小球数 (平均)	小球重 (平均)	総重量増加率
100g以上	120.8g	158.7g	131.4%	9.0	149.2g	254.9%
70~99g	84.8	126.9	149.6	7.6	61.0	221.6
50~69g	59.1	111.7	189.0	6.6	40.8	258.0
30~49g	42.1	95.8	227.6	4.7	26.0	289.3
10~29g(球状)	18.9	77.8	411.6	4.4	22.3	529.6
10~29g(扁平状)	15.3	70.2	458.8	2.9	16.5	566.7
10g以下(球状)	—	13.5	—	1.5	3.2	—
10g以下(扁平状)	—	12.9	—	1.5	2.0	—